

津江・長谷部氏に就ての一考察

立川輝信

目次

| | |
|-------------------|--|
| 一、序にかえて | |
| 二、津江とは | |
| 三、長谷部氏一族と津江との関係 | |
| A、造領記所載 | |
| B、津江地方にのこるもの | |
| 1. 雪ヶ嶽 | |
| 2. 栃原田原山牛ヶ城 | |
| 3. 蔵ヶ谷（一名御所の谷） | |
| 4. 大野村老松天満社 | |
| 5. 中津江村津江神社とその棟札 | |
| 6. 前津江村大野老松神社棟札 | |
| 7. 全赤石老松神社棟札 | |
| 8. 伝来寺 | |
| 9. 菊地氏との関係 | |
| 四、異説長谷部信連一族に就て | |
| A、花見氏説 | |
| B、諸国の長谷部姓 | |
| C、全長氏 | |
| D、穴水城と信連貝 | |
| 五、結 び | |
| 参考文献 | |
| 10 津江狂園図 | |
| 11 長谷部氏神社 | |
| C、姓氏家系大辞典所載 | |
| (イ) 津江氏 | |
| (ロ) 長谷部氏（豊後） | |
| D、古文書 | |
| (イ) 田北学編・編年大友史料所收 | |
| (ロ) 大分県史料所收 | |

一、序にかえて

十時英司氏はその研究論文大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書中で「津江の史蹟は南北朝関係と長谷部関係とが殆んどその全部である。」と云っているくらい、津江地方はこれ

等の史蹟とこれに関連する幾多の伝説とがその大部分であると筆者も思う。従つてこの地方の調査研究にはこれを度外視することは出来ないのではあるまいか。この点筆者は今夏八月西日本新聞社主催「津江地方学術調査」の成果に多大の期

待と興味を持つたのであるが、民俗班長分大助教授半田康夫氏の語るところによれば、同班は屋号調査其他から長谷部氏は津江氏の家臣的地位の者と見て問題視せず、深く調査せなかつた。又歴史班渡辺澄夫分大教授の莊園制から見た調査の一部が新聞紙上に発表されたが、長谷部・津江兩氏に就ては触れていない。或は本号所載の渡辺・中野兩氏の右調査による研究の発表に含まれるかとも思うが、本号が右調査の特集と聞き、取り敢えず筆者の泥縄式推考の足らないこの小研究を発表して敢えて各位の御叱正を乞う次第である。幸いに他山の石となれば望外の幸いである。

一、津江とは

津江地方は天正十七年己丑十月豊府大友家より検地せしめたときは、大野・赤石・栃原・野田・中西・梅野・河原・柚木の八村が津江莊となつているが、森春樹は之に対して其著「造領記」中に曰く、

「此郷莊の分、古制にあらず、近年押はかりて定るものなり、上古の官制に莊なし、其故は龜山抄（森氏著）に委しくいへり。今試に古制の五郷を配分して見れば」

として所謂津江は石井郷の内に入れてある。即ち石井郷の統

津江・長谷部氏に就ての一考察

る村々は、

石井・佐古後世石井より分る・寺内・小畑・川下・上野・南内川野
・北内川野・堂尾・山手・南高瀬・北高瀬・西高瀬・高取
・万々金・栗林・鎌手・小五馬・大野・赤石・栃原・野田
・中西・梅野・川原・柚木合せて二十六村。」としてある。
今日は津江と総称し、前津江・中津江・上津江の三村に分れ、日田郡南半の山地の地域で日田地方では古來「津江」と云えば田舎の代名詞と云われている地方である。

三、長谷部氏一族と津江との關係

(A) 造領記所載

津江長谷部家

御鳥羽院建久三年、鎌倉將軍頼朝卿惣追副使となり給ひて同四年妾腹の子、一法師丸を大友次郎経家の養子に遣されたりしを、豊前・豊後の守護職となして下さる。これ則ち大友左近將監能直君也。其時高倉の宮の臣兵衛尉長谷部信連が猶子義連、実は高貴の御種なるが、能直君に属従して豊後に下りしを能直日田に遣したり。是津江家の元祖也。義連栃原村に居れり。この年鎌倉將軍家富士野に狩し給んとて狩の古実伝えに、梶原景季・仁田忠常二人を肥後の阿蘇大宮司家に差

遣さる。其時二人津江に來りて義連が宅にやどりて景季假山を築けり。其後其假山の中に寺を建たり。これによりて堂の下まで庭中の石猶有り。此寺今の伝來寺也。義連津江に在て山中をひらきて子孫をのこせり。

春樹曰、一説には信連元暦中に來れりともいへり。然れとも此説はおぼつかなし。梶原・仁田津江に來りし事妄誕のことなれども、此伝説阿蘇大宮司家にも慥に伝え有て、祖神建巖龍命、阿曾の下野の狩し給ひし古実、大宮司家に伝れるを頼朝卿聞て、其古実伝えに二氏をさし下さる。その狩の古図大幅三幅大宮司家に蔵せり。二氏は狩の古実を伝て、試の狩を豊後の九重山の原にてしたり。云々。

(B) 津江地方にのこるもの

1. 雪ヶ嶽

前津江大野の西南にあり、津江長谷部氏代々在城の旧蹟と伝えられ、附近に幾多の古蹟伝説がある。

2. 栃原村田原山牛ヶ城は大野雪ヶ嶽城主長谷部氏六代目津江能登守宗信の時代(一説宗信は雪ヶ嶽城主でなく、義信系六代目とする)菊地肥後守の攻撃にそなえて構えた城と伝えられている。

3. 蔵ヶ谷(一名御所の谷)

此の地は治承四年の昔、長谷部信連が、以仁王の王子豊津宮を奉じて豊後に遁れ、平家追討を恐れて、深山であるこの津江莊に來て宇多源氏の末裔、日隈五郎信武によつた。信武の家はこの蔵ヶ谷にあつたが、信連と共に心を合せて若宮を保護し奉つたので、この地を御所の谷とも稱する様になつたとも伝えてゐる。

4. 大野村老松天満社

日田大藏大夫永季が太宰府天満宮を勧請したと伝うる前津江村大野の老松天満社を長谷部信連が此の地に隱遁し、建久四年信連の養嫡長谷部義連が大野雪ヶ嶽に居城し、鎮守の神として崇敬深く、三百二十餘年を経て、長享二年津江殿、長谷部信俊(国志・造領記には信俊の先代信安とあり)社殿を再建する。

5. 中津江村津江神社とその棟札

中津江村大字合瀬字津江山鎮座元村社津江神社は由緒深遠な神社で、相殿配祀中に以仁王・津江山城守長谷部信連・日隈四郎信弘各氏の像代がある。

この宮の祭典は「梅野のあばれ祭」と稱し、今日まで伝來

の古式の一である。小麦粉を以て餅をつき神供とするが、そ

の製法は頗る粗野であるとのことである。尚この祭の由来は

豊筑肥三州の境三国山の西麓鬼戸ケ谷に邪賊が籠居して勢強

暴、遠近の住民は頗る之に苦んだので、長谷部宗俊は大友家

の命により、此の賊を討つことになり、老松大明神の神助を

請い遂に征討を全うした。そこで毎年六月十五日を例祭日と

して祭典を始めた。而して天福元年十一月に前記三氏の像代

を配祀し津江鎮護の産土神、長谷部氏武運長久の守護神とし

再建修繕は専ら長谷部氏が之に当る次第である。同宮所蔵の

棟札に次の如きものがある。

イ、延徳三年長谷部信安

ロ、慶長八年八月廿五日大檀那梅野源命衛門長谷部信久

ハ、其他

寛永十八年・寛文九年・貞享元年・明和元年の上棟札は

悉く長谷部関係のものである。

6. 前津江村大野の老松神社に文明・明応以前は文字不明であるが弘治以後は判読される形代が多数ある。而かして文禄以後は全くない。これは津江領主長谷部統永が天正十八年土地を豊臣秀吉に献じて民間に伍し、形代奉納を止めたとされ

ている。

7. 前津江村赤石の老松社の棟札に

寛文十二年三月大檀那長谷部勘左衛門尉源信貞とあり。又

宝暦九年十月吉日のものには

願主長谷部宇右衛門尉菅信督とある。

8. 伝来寺

中津江村大字栃野にある伝来寺は郡内古刹の一つであるが

寺記によれば、延元三年二月長谷部信雄兜卒（とそつ）伝来

の二寺を津江荘に建て、大智禪師を迎えて開山とした。大永

年中長谷部信連二十四代の孫山城守重光伝来寺をして真宗に

改宗した。尚当寺の主僧は長谷部姓で信連の末葉と称してい

る。

この寺は元、同郡栃野村の東辺にあつた天台宗、慈雲山林

泉寺を同寺の主檀越であつた長谷部重光が同寺住職権僧都宗

甫の弟子となつて法名光輝と称し、日ならずして住職となり

後に浄土宗に帰依し、慶長甲辰一月重光の宅地に同寺を移転

して阿弥陀如来の絵像を以て本尊としこの寺を開基し、寺号

を伝来寺と称したと。

9. 菊地氏との関係

菊地武光は隣境津江に着眼しその経営に怠らず、長谷部氏は是と通じて勤王の爲めに盡した。津江家系譜によると、津江家では、八代の義連及其子泰連が正平の頃より菊地に属し遂に戦死した。また長谷部家では、信義信雄信経信経が出て宮三位中将の命を奉じて活躍したと。

10 津江莊園図

前津江村赤石字虫秋の渡辺干城氏所蔵、鷺尾順敬博士証明の、天正十八年霜月八日付の津江莊の絵図には津江掃部介統長の署名がある。

11 長谷部氏神社

明治十年大野老松社に津江郷開祖長谷部氏を祭つた境内社を建てた。

(C) 姓氏家系大辞典所載「津江と長谷部氏」

(イ) 津江(ツエ) 豊後・筑後等に此の地名存す。

1. 長谷部姓 豊後国日高(日田)郡津江邑より起る。長谷

部の裔なりと云ふ。南北二家あり、信兼・雪ヶ嶽に住みて口津江と云ひ、其の弟信成、栃原にありて奥津江と称し、

これを両津江と云ふ。(豊後遺筆)田中元勝云ふ「兵藤山は豊後日田郡兵藤村にありて、当時津江住人、故高倉宮の

侍長兵衛尉信連が後に長谷部信雄と云ふ人の所領なりき。件の信雄・將軍宮の近比九国に下向あるべきよしを聞きつけて、副將軍三位中将、菊地武重などをたよりて一番に味方に参りたる上に、其の所領兵頭村をさへ、菊地家の香法院広福寺に寄附したりし故、ひやうとうの山のまゐりて候事こそめでたくぞんじ候へなど見えたる」と。

氏は河北文書に津江孫太郎、五条家文録六年文書に津江山城守鑑盛、また同文書に「津江信濃守、津江山城守、津江長門守、津江鑑盛、同親信」等、多く見え、また鏡山文書に「両津江殿」と見ゆ。又五条家系図に「矢部七郎長安の母は津江山城守鑑盛の女」とあり。

鑑盛は信兼の後、十一世の孫にして、津江城主たり。天正六年戦す。奥津江は之れより前、絶えたりと。

2. 筑後の津江氏、前項氏の後にて、津江周防守長谷部鑑盛は、竹野郡に居りしと云ふ。

3. 豊前の津江氏、暦仁元年、宇都宮道房の家臣に津江兵部見ゆ。

4. 菊地氏族、肥後の豪族なれど、第一項の氏名を冒せしならん。赤星系図に「右京亮武生(実は菊地武時の八男也)

—遠江守武統（又次郎、西寂）—武元（津江三郎）—武定（三郎）—と載せ、又赤星系譜には「武統—武元（津江三良）—武興、弟武定」と云ひ、中興系図に「津江、藤姓、菊地遠江守武次の男・三郎武光これを称す」とあり。永正元年菊地政隆侍帳に「津江大和守邦郷」とあるも此の族ならん。

5. 雑載。その他、日向記に津江藤次あり。又狂歌師に津江林蔵、月良と号す。江戸幕臣也。

(四) 豊後の長谷部氏

津江の豪族にして、これも長谷部信連の裔と称す。

肥後国志に「豊後国津江山の住人、長谷部山城守信経、菊地家と連年不和なりしが、或る時、肥後守武光、迫間川に逍遙しけるを信経、聞き附け、手勢三百人を率ゐて馳来り討んとす。武光、纔に二十四人の人数にて信経を追ひ散し百餘級の頸を討取る」と。又樋口系図に、「豊後柚木邑津江周防守長谷部鑑盛女」を載せたり。

(D) 古文書

(イ) 田北学編・編年大友史料自正和二年至正平六年富山房発行

右書（自三二九頁至三三〇頁）所收肥後広福寺文書による

津江・長谷部氏に就ての一考察

と次の如く津江の長谷部信経関係の古文書がある。

1. 延元三年十一月七日、豊後日田郡津江の長谷部信経が津

江山内兵藤村を、寺建立のため大智上人に寄進する（編年大友史料所收文書第五六七）

2. 同年十一月十五日、長谷部信経津江山内兵藤村大平山兜卒寺敷地を大智上人に寄進する。（同書文書第五六八）

3. 同年十二月八日、宮三位中将、大智上人の請に依り、其所領豊前規矩郡蟪田郷内田地屋敷を津江兵藤村と交換する

ことを許し給う。（同書文書第五六九）

(ロ) 大分県史料（十三）所收

1. 長谷部文書一・二・三の三通

右前津江村田代、長谷部利久之助氏所蔵は何れも津江氏となつてゐるが、既に記した如く津江氏は長谷部氏の一族である。従つて本文書を長谷部氏が所持することは何等差しつかえないことである。

2. 伝来寺文書（文書第七一四）

本文書は中津江村伝来寺の所蔵であるが、本寺も既述の如く長谷部氏の建立で長谷部姓を名乗つてゐる。従つて本文書が義統より津江信濃守宛になつてゐるが、同寺と無関係とは

思われぬ。

以上列挙した諸点よりして、津江地方調査の民俗班が此の地方仙頭家に長谷部氏が少ないなどの理由で問題視しない見方には筆者は賛成出来ない。筆者は津江に於ける長谷部氏は以上列挙の点よりしても同地方の最有力者であつたと黒考する。

四、異説長谷部信連一族に就て

(A) 花見氏説

源平盛衰記・吾妻鏡・長谷部家譜・長氏由緒記・大日本史等による花見朔郎氏の研究では長谷部信連は平安末、鎌倉初期の武人、右馬允為連の子で、十六歳の時滝口に候し、一夜盗難があつた際、信連盗人を追うて四人を斬り一人を捕えたその功によりて左衛門尉に任ぜられ、のち高倉宮以仁王に仕え、治承四年王の平家追討に参劃し、謀洩れて王を奉じ、園城寺に避けた。然かるに王は年ごろ愛玩せる小枝と称する漢竹の笛を忘れたのを遺憾としたので信連は引き返してこれを持参して王に献じた。王はこれを悦んで共に園城寺に赴こうとせられたが、信連は平氏の兵が王宮を囲むに当り、これを守り、平氏にあたる者の一人もないのを嘆き、且つは命を

惜んで逃亡したとのそしりを受くることを恥じて、強いて王に請い、ただ一人王宮に帰えつて敵と戦い力戦して遂に捕えられ、六波羅に護送せられた。平宗盛は信連に王の行方を責め問うたが敢えて答えず、辞色壮烈を極めた。これを知つた清盛はその意気を壮として伯耆日野郡に流した。後平氏が亡び、源氏の世となつたので、鎌倉に至るや、頼朝その功を賞し、文治二年四月安芸檢非使所に補し、能登珠洲郡大屋荘を与えた。その後建保六年十月廿七日大屋荘河原田に歿し子孫代々能登に居住し、長氏を称し、のち前田氏に仕えている。となつている。

(B) 諸国の長谷部姓(姓氏家系大辞典所載)

諸国に多くある長谷部姓中、長谷部信連に附会するものを摘記すれば左の如し。

1. 能登の長谷部氏 長谷部の裔にして

源平盛衰記に「高倉宮に仕へ奉れる侍に長谷部信連あり、

長兵衛尉と称す」と。後頼朝より能登国珠洲郡大屋庄を賜

ふ。東鑑卷六、二十三(死)等に見え、文治二年四月条に

「右兵衛長谷部信連は、三条宮の侍也」と。また建保六年

十月条に「長谷部信連法師、能登国大屋庄河原田に於いて

卒す。是れ本の故三条宮の侍、近くは関東御家人也。長馬新大夫為連の男也」など見ゆ。此の子孫、単に長を以つて氏とす。

三州志に「長谷部信連、初め能登郡の熊木に住し、後穴水大屋莊河原田に住すと、長家記に見ゆ。是より長氏、曆世の間、往々転居はあれども、二十世の綱連まで、三百八十九年許り斯の穴水に居城せり」と。

2. 越後の長谷部氏

新編会津風土記、蒲原郡柝堀村条に「館迹。村民伝へて、治承年中、長谷部兵衛尉信連、高倉宮に従ひ来り、守護の爲此に築く。信連もと大和国広瀬郡広瀬郷を領せしかば、故郷忘れ難く、此の名を此に移し、広瀬城と名づけしとぞ」と。

3. 武蔵の長谷部氏

榛沢郡小前田邑の名族にして、新編風土記に「先祖長谷部信連の末葉と云ふ。今も信連が遺物として小袖一つあり。按するに、東鑑に『長馬新太夫為連の男左衛門尉長谷部信連法師、能登国大屋庄河原田に於いて、建保六年十月廿七日卒せしこと見ゆ。今加賀藩士長甲斐守等は、其の子孫なり

と云ふ。されどその族速く当国へ移ること、いかなる故にや、今は伝へず。』

4. 尾張の長谷部氏

中島郡の豪族にして長谷部信連の庶胤信近（大塚村）の子民部大輔源政（唱呼）、其の子政泰入道明阿、その孫長又三郎持信は建武年間の人也。

性海寺縁起に「郡主民部大輔源政は、貞観帝第六皇子貞純親王の苗裔、長谷部信連の庶胤、信近の子也」と載せ、又長谷部系図に「信連の曾孫信近―唱呼―政泰（明阿）、孫長又三郎持信」など見ゆ。

5. 伯耆の長谷部氏

日野郡下榎村敵島神社は、長谷部信連の子孫、敵島より勸請すと伝へ、而して旧神主は長谷部氏にて、古き棟札に長谷部氏の人、多く見ゆ。長門本平家物語に信連の事を「本所衆所右馬允たつらが子なり。伯耆国にれるらしくて、金持が辺にへめぐりけるを云々」とあると縁故あるべし。

6. 備後の長谷部氏

甲奴郡の豪族にして芸藩通志に「薄子山は深江村にあり。長谷部右衛門（信連の裔と云ふ）居城也。

一説に右衛門は、郡内上下村、護国山に城す、これ其の支族の所居なるべしといふ。両所に居りしも、忘るべからず」と。

また「長谷部信連の子良連、承久三年、官軍敗走の後來りて、甲奴郡に蟄居す。其の子孫、或は官軍に屬し、又尊氏に屬し、応仁の頃には、山名に屬し、又其の後は、尼子に従ふ。凡そ十二代を歴て、元信より、毛利家に屬し、元近秀近、実連同じく戦功あり」と。

7. 筑後の長谷部氏

将士軍談に「長谷部氏、長谷部信連、開基帳に云ふ『由葉郡田籠村諏訪大明神、開元建立未だ詳かならず。寛正四癸未年、長谷部時信の再興』云々と。或る記に云ふ「長谷部信連は、新川村長岩に居り、新川、田籠、小塩、妹川、小坂、流川、溝尻、朝田、隈上、山北、大石、原口、橋田等の数村を領し、時信に迄んで十七代、其の家断絶」と。今按ずるに、姓氏錄に長谷部造は神速日命十二世の孫千速見命の後也と。豊後津江住津江周防守長谷部鑑盛、竹野郡中に有りしこと物に見えたり。時信は此の祖先たるべし。

加賀侯の老臣系魚住の城主は長九郎左衛門長谷部信連の苗

裔にして、長の一字を取つて家号とす。異本太平記、延文四年に長九郎兵衛あり、肥後玉名郡石貫村広福禅寺の所蔵菊地武重が真蹟文書に、兵藤山まゐりて候事こそ目出度候へとあり。兵藤山とは豊後日田郡兵藤村にて、当時、津江住人故高倉宮の侍、長兵衛尉が後に、長谷部信雄と云ふ人の所領なりき」と。

(C) 諸国の長氏 (姓氏家系大辞典所載)

中世以後、長谷部の人、省略して、単に長氏と云ふ。其流渺からざれど、長谷部信連、武士として勢力ありしより、多くは其の後裔と称す。

1. 長谷部姓

物部氏の族なりと。高倉宮以仁王の侍に長谷部信連あり。平家物語に「宮の侍に長兵衛尉長谷部信連と云ふ者あり」と。奮戦して捕へらる。同書に「並び居たりける平家の侍共、哀れ剛者や、是らをこそ一人当千の兵とも云ふべけれど、口々に申しければ、其の中に或る人の申けるは、あれが高名は今に始まらぬ事ぞかし。先年、所に有りし時、大番衆の者共の留め兼ねたりし強盜六人に、唯一人追ひ懸かり、二条堀川なる所にて、四人を切伏せ、二人を生捕つて

其の時成されたりし左衛門尉ぞかし。あたら男の斬れんずる事の無慚さよと、惜み合へりければ、入道相国いかゞ思はれけん、さらば斬なぞとて、伯耆の日野へぞ流されける。平家滅び、源氏の世に成りて、東国へ下り、梶原平三景時に附いて事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿、神妙なりと感じ給ひて、能登国に御恩蒙りるとぞ聞えし」と見ゆ。

また東鑑治承四年五月十五日条に「長兵衛尉信連、太刀を取りて相戦ひ、光長の郎等五六輩、これが為に疵を被る。

其の後、光長・信連及び家司一両、女房三人を搦め取りて歸去す云々」と載せ、又文治二年四月四日条に「辛亥、右兵衛長谷部信連は三条宮侍也。宮、平家の讒に依り、配流の官符蒙らせし時、延尉等、御所中に乱入の処、此の信連防戦大功ある間、宮を三井寺に遁れしめ御訖んぬ。而して今奉公を拙んずる為参向す。仍りて先日の武功に感じ、態々御家人と爲し、召し仕はるるの由、土肥二郎実平（時に西海に在り）の許に仰せ遣はさる云々。信連、国司より安芸国檢非違所、並に庄公を給ひ畢んぬ。見放すべからざるの由云々」と。

2. 能登の長氏

長兵衛尉信連の後裔中、最も栄えし流也。初め信連、頼朝より能登国大屋の庄を賜ふ。その後、東鑑、建保六年十月廿七日条に「今日、左兵衛尉長谷部信連法師、能登国大屋庄河原田に於て卒す。是れ本の故三条宮の侍、近くは関東御家人也。長馬新太夫為連の男也」と見ゆ。子孫、其の姓を略して単に長と云ふ。

此の長氏は、三州志に「初め長信連、能登郡熊木に住み、後穴水に移ると、長家伝に載す」と。又鳳至郡穴水城条に「長谷部信連初め能登郡の熊木に住し、後穴水大屋莊河原田に住すと、長家記に見ゆ。是れより長子、曆世の間、往々転居はあれども、二十世の綱連まで、三百八十九年許り斯の穴水に居城せり、然るに天正四年、謙信、能登へ乱入の時、綱連、穴水を引き払ひ、七尾城に保む。仍りて越兵之に代り居たりと云ふ。同郷菩提所瑞源寺に曆代の位牌あり。

長氏代々の序次は、信連より、朝連、政連、有連、盛連、宗連、正連、頼連、左衛門尉（実名不知）、藤連、泰連、政連、光連、透連、氏連、教連、英連、統連、綱連、連龍

と。連龍までにて二十一代也。是れ正統なり」と。

3. 南北朝の長氏

信連五世孫盛連、建武の頃官軍に属す。又文和四年の天野安芸守遠政代・堀籠六郎左衛門尉宗重の軍忠状に「兇徒長伊勢守胤連の一族家人等、当国能登島（鹿島郡）西方金頸城に楯籠る間、文和四年三月十七日、彼の城に押し寄せ、向陣を取り、毎日合戦を致し、同六月十四日夜、彼の城を追落し、甥遠左衛門三郎速行、疵を被る」など見ゆ。また「盛連、官軍に属せしが、兵敗れて京師に走る。是の時に当りて州人吉見氏頼、尊氏に応じ、州豪郷背常なし。正平五年盛連の孫宗連、足利義詮に属し、采邑を復し、州事を知る」と伝ふ。

3. 但馬の長氏

長谷部信連の後にして当国の大族也。鎌倉時代、所領を当国に受く。太田文に「出石郡安美郷七拾六町七反六拾歩内地頭大門（史料本に大江、黒本に大内を作る）氏、出石三郎信政の嫡女、長右衛門四郎長連が妻」と。

4. 筑前・筑後の長氏

長谷部信連の裔と称す。管内志に長監物等見ゆ。

(D) 穴水城趾と信連貝

昭和八年十月五日、三陽書院発行、平野小潜著^{新風}「郷土の史蹟」中に、源秀頼五世の孫長谷部信連が、能登国能登郡の地頭となり、この地に築城し、その子孫は連綿として今日に及んでいる。伝説によると信連は以仁王に従つて宇治の戦陣に臨んだ時、敵の矢が飛び来つてその旆に中り、「長谷部」の「谷部」の文字の部分が千切れて飛んだから「長谷部」を「長」と改めたといふことである。その城趾は町の東端にあつて俗に城山と呼び、頗る要害の地として名高い。長谷部氏二十世の居城であつたが、今は何も残っていない。長谷部信連が能登の地頭に補せられて任に赴く時、頼朝は、由利時頼の妹をその配偶として選んでやつた。美しい新婦を伴れての赴任は、信連にとつては誠に嬉しいものであつたに相違なからう。けれども新婦の身になれば、親しい者に背いて能登の地に移り、生別と死別を兼ねぬ鹿島立ちは、流石に哀愁の涙を催すに充分であつた。せめてもの心やりに、日頃好む、由比ヶ浜産の蛤を齎らし「わが子孫栄ゆるものならば汝も殖えよ」と誓つてこれを穴水の海底に放つた。それ以来殖えて今もこの地方では、鎌倉貝、信連貝、御所盛などと称えられて

いる。

追記 安部領田氏「豊国史談」第七号所載の「長谷部信連の後裔」所説中に「一説には長谷部信連の子孫は加賀國に在り云々」と書いてあるが結論的には日田津江説を主張している。

五、結 び

以上兩説によつて同名異人でない長谷部信連とその一族の事蹟が全く相違して、伯耆の日野と能登の大屋荘と、我が豊後、特に地元日田の歴史と伝説に今のところ筆者の知る範圍に於て何等の関連を持つていない。ただ共に漢竹の笛を愛玩し、津江長谷部は二十五代鑑盛の時、大友に属して耳川の敗戦に名残りの秘曲を吹いたところ、折柄漲る川の和浪に韻し山に響いてその音を倍し、敵味方共に戦を止めて聞き入つたと。又大屋と大野はその音相通じ上津江村にある川原は大屋莊河原田に似通つてゐる。又前津江に隣接する日田市高瀬村には長氏を名乗る一族が今も現存し、村の旧家として繁栄しているが這般の關係は今筆者は知らない。伝説としては兩説共に生かし得るが、正しい歴史としてはこのまま兩説の肯定は出来まい。察するに或は能登大屋莊の長谷部一族の誰か又は長谷部氏に由縁のある者が津江に來り住み、自己の経歴由緒をよりよくする為に作つた系譜ではあるまいかとも思われる。何れにしても長谷部一族が津江郷に於ける草分けの一つであり、旧家で名家であることは間違いない事実だと考え

津江・長谷部氏に就ての一考察

る。ただ従来の郷土史家が森春樹の所説を豊後国史・太宰管内誌を始め、すべての郷土史に踏襲して、異説である他県に残る長谷部氏に就て何等関連の追究を試みないのは筆者の最も遺憾とするところである。須く博学の識者によつて郷土史的研究から一步を進め、地方的立場で深く掘り下げて貰いたいと念願する一人である。

附記 筆者の実兄田代友市がかつて赤石・川原の両小学校長を勤め、筆者又赤石・鎌手の小学校に職を奉じたことがあるので、かねて本地方には関心を持ち十数年前伯耆其他県外に於ける長谷部氏に就て文献による調査を行い、その研究結果を筐底に入れてあつたが先年の祝融で焼失した。こうしたことから甚だ杜撰な着想文ではあるが、所感を書き綴つて各位の御批正を仰いだ次第である。
(本会常任委員)

参 考 文 献

1. 大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書第十一江(津江の史蹟伝説)十時英司)
2. 同第十二輯(津江勤王事蹟)十時英司)
3. 森 春樹著 造領記 日田高等学校郷土史班刊
4. 千原豊太著 三隈抄 龜陰山莊刊
5. 唐橋世齊 豊後国志 朋文堂
6. 伊藤常足 太宰管内誌
7. 加藤賢成著 豊後遺事 稲光会
8. 平野小潜著 新風郷土の史蹟 三陽書院
9. 太田 亮著 姓氏家系大辞典 其刊行会
10. 吉田東伍著 大日本地名辞典 富山房
11. 豊国史談第壹号